

特別企画展図録 ～市内の古墳と埴輪～

長岡京市域を含む乙訓地域には多数の古墳が分布しており、古墳時代を理解する上で重要な地域と言えます。財団法人長岡京市埋蔵文化財センターでは、これまでに恵解山古墳をはじめ、市域に所在する古墳の発掘調査を行い多くの成果を修めてきました。

今回の特別企画展では、市内の主要な古墳～^{いまごとくるまづか}今里車塚古墳、^{いげのやま}恵解山古墳、^{つかもと}塚本古墳、^{かいでん}開田古墳群～から出土した埴輪に焦点をあてた展示を行いました。埴輪の多様な種類や形態の変遷、古墳に立て並べられた姿をご覧いただき、本市文化財保護のご理解にお役立ていただきますようお願い申し上げます。



印刷 平成 22 年 10 月 30 日
 発行 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター
 〒 617-0853
 京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の 1
 電話 075-955-3622
 ホームページ <http://nagaokakyo-maibun.or.jp/>



▲ 長岡京市内の主な古墳

(※青字が図録に掲載した古墳)

- ・今里車塚古墳 (今里 4 丁目、今里庄ノ淵)
- ・恵解山古墳 (勝竜寺、久貝 2 丁目)
- ・塚本古墳 (開田 3・4 丁目)
- ・開田古墳群 (開田 1 丁目、長岡 1 丁目他)

いま ざとくるまづか 今里車塚古墳



▲ 後円部に取り付く造り出しと陸橋

▼ 後円部の葺石と1段目の木柱



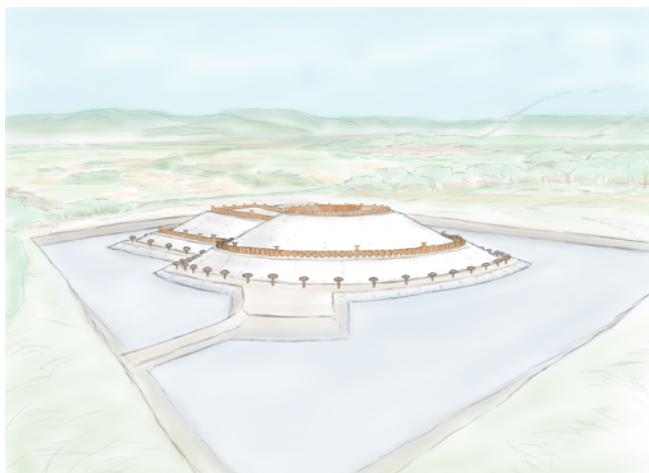
今里車塚古墳は、乙訓寺の北東に位置します。すでに墳丘は消滅しましたが、昭和初年頃までは5m以上の高まりが残り、車塚と呼ばれていたそうです。

古墳は、昭和53・54（1978・79）両年の道路新設工事に伴う発掘調査で、葺石と周濠の一部が確認され、地元の伝承や地籍図の検討から前方後円墳に復元されました。その後の数次にわたる調査で、後円部の径約46mをはかる5世紀前半の首長墓と判明しました。この古墳は、後円部に長さ8m、幅6mの造り出しが取り付け、周濠外堤との間には低い陸橋が設けられています。周濠の平面形は一般的な盾形ではなく、後円部の外縁が直線的に延びて方形を呈する数少ない古墳です。このほか、周濠のそばから埴輪円筒棺が1基発見されました。

今里車塚古墳で最も注目されるのは、墳丘裾の平坦面に木の柱が4m前後の間隔で並び、周濠内から出土した笠形木製品が「木の埴輪」として立てられたことが初めて明らかにされた点です。樹種はともに水湿に強い高野槇が使われています。

なお、古墳は長岡京造営に際して西二坊大路と重なる前方部が削り取られ、濠は埋めて整地されたことがわかっています。

▼ 今里車塚古墳の復原想像図



今里車塚古墳から出土した埴輪は、普通円筒埴輪、ヒレ付き円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪のほかに、家形、蓋形、盾形、冑形などの形象埴輪があり、そのいずれも黒斑を有しています。

復元された盾形埴輪の盾面は、高さ 59cm、下辺の幅 52cm、厚さ約 1.5cm。円筒の基底部は径 34cm。盾は、外側を鋸歯文で囲み、内側は三分割された中央部に横方向の直線文、上部と下部はタテ方向とヨコ方向の直線文を施しています。冑形は鉢の前方がとがった衝角付き冑とよばれるものです。首を覆う「しころ」部分には革製の冑を表現した模様があります。乙訓地域では初めての発見です。



笠形木製品は、大小 2 種類あります。径 55cm の大型品の中央には貫通穴があり、上面は半球形に加工されています。小型品は径 30cm で貫通穴はありません。これまで出土した木製品と同じく、木目に沿って深く溝状に風化しています。

円筒埴輪は、普通円筒埴輪のほかに、円筒の両側に板状の突起を付けたヒレ付き円筒埴輪があり、今里車塚古墳では後者の割合が高いのが特徴です。ヒレ付き円筒埴輪は、両面または片面に赤色顔料を塗布したものが目立ちます。



▲ 冑形埴輪と盾形埴輪

◀ 笠形木製品の残片

▼ 赤色顔料が塗られた埴輪片



いげのやま 恵解山古墳



▲ 上空から見た恵解山古墳

▼ 副葬品埋納施設

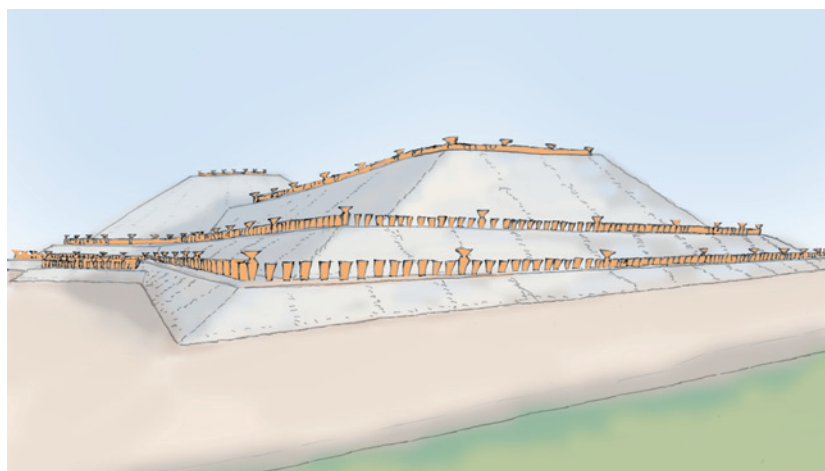


恵解山古墳は、今から約 1600 年前の古墳時代中期に築かれた前方後円墳です。古墳は、主軸を北西から南東に向けており、後円部 3 段、前方部 3 段に復元されます。その大きさは、全長が約 128 m、後円部の直径約 78 m、前方部の幅約 76 m を測り、乙訓地域最大の規模を有しています。墳丘の周囲には浅い周濠^{しゅうごう}が巡らされ、周濠を含めた古墳の全長は約 180 m に及びます。現在、古墳は竹藪に覆われていますが、築かれた当時は斜面に石が葺かれ、平らなところには埴輪が並べられていました。古墳に葬られた人物の名前は記録に残っていませんが、その大きさなどから少なくとも乙訓全域を支配した実力者の墓であったと考えられます。

恵解山古墳では、昭和 55 年の第 3 次調査において、鉄製の武器など約 700 点を納めた副葬品埋納施設が発見されました。古墳から多量の鉄製武器が出土した例は全国的にも非常に貴重であることから、恵解山古墳は昭和 56 年 10 月国史跡に指定され、鉄製武器などの出土品は平成 11 年に府指定文化財に指定されています。近年に行われた古墳の保存整備に伴う発掘調査では、墳丘の東西が大きく改変され、現状より幅広の形態であったこと、前方部の東西に造り出しを備えること、造り出しの大きさが東西で異なることなどが分かってきました。

恵解山古墳の埴輪は、いずれも野焼きで焼成され、円筒埴輪には円形の透かし孔^すと外面に断続的なヨコハケ^{あな}が施されており、中期の埴輪の特徴を有しています。円筒埴輪列は、1 段目平坦面の後円部北側（第 9 次調査）と東側くびれ部（第 9・10 次調査）、2 段目平坦面は前方部西側（第 5 次調査）と東側（第 8 次調査）、そして西側造り出しの接続部（第 11 次調査）で確認されています。

▼ 恵解山古墳の復原想像図



円筒埴輪 埴輪列に並べられた円筒埴輪に完全な形のものはありませんが、^{とつたい}突帯4条で5段と考えた場合、64 cm程度の高さに復元できます。底部の直径は20 cm程度で、古墳の大きさに比べて小振りであるといえます。埴輪列には朝顔形埴輪も配置されていたと考えられますが、大きさや形態的な特徴は分かっていません。

形象埴輪 恵解山古墳で確認された形象埴輪には、家・船・^{きぬがさ}蓋・^{たて}壺・^{ゆぎ}盾・^{くさずり}靱・草摺・水鳥があります。

家形埴輪では、西側の造り出し周辺から出土したものが注目されます。^{はりゆき}梁行と^{けたゆき}桁行がともに1間で、突帯の幅を除くと桁行が約29 cmを測ります。通常、家形埴輪の内部には床などの表現を行いませんが、この例では、内部に床を設け、その中央が長方形に^く割り抜かれていました。中央の割り抜きは水を溜め^{ます}る^{すい}榊を表現したもので、導水施設や水に関わる^{さいし}祭祀を行った建物を模したと考えられます。

水鳥形埴輪は、東側の造り出しから出土しました。頭部から^{けい}頸部の破片は、高さ約17 cm、^{くちばし}嘴先端までの長さは約12 cmを測ります。全体は復元できませんが、^{おぼね}尾羽・翼・足の破片も出土しています。頭部には^し刺突で黒目、^{はんさいちっかん}半截竹管で白目が、そして、^{せんごく}線刻で平らかな嘴が表現され、とても愛らしい表情を^{かも}醸し出しています。出土地点は東側造り出しの周辺に施された^{れきじき}礫敷部分であり、周濠を海や湖、礫敷を^{すはま}州浜に見立てて配されていたと考えられます。



▲ 普通円筒埴輪



▲ 導水施設と考えられる家形埴輪

▼ 水鳥形埴輪



▼ 形象埴輪



- 1～3 家形
- 4～6 蓋形
- 7・8 草摺形
- 9～11 盾形
- 12 壺形

つかもと 塚本古墳

塚本古墳は、1981年の立会調査で初めてその存在が明らかとなった、古墳時代後期の小さな前方後円墳です。これまで立会調査を含めて7回の調査が行われていて、全長約30m、後円部の直径約20m、周囲には深さ0.5mの浅い濠^{ほり}を持つことが判明しました。盛土は完全に削られていま

すが、大きさから2段に盛られていたと推定され、表面の葺^{ふき}石はなかったようです。周辺に「西塚本」「東塚本」の地名が残っていたことから、新たに「塚本古墳」と命名されました。濠の中からは供え物として置かれていた須恵器などの他に、非常に多くの埴輪^{はにわ}が見つかっています。これらの埴輪は本来古墳の上に建て並べられていたものが、古墳の破壊に伴って濠の中に転落したものとみられ、大量の円筒埴輪のほかに、朝顔形埴輪^{きぬがさ}、蓋形^{たて}、盾形^{たて}、大刀形、家形、人物形、動物形（鳥・鹿・馬？）、石見型盾形埴輪^{いわみ}と呼ばれる特殊な形状をしたものなどが出土しています。小さい古墳ながら埴輪の種類が多く、乙訓では塚本古墳でしか出土していないものもあります。

そのひとつが石見型盾形埴輪です。この埴輪は奈良県の石見遺跡^{いわみ}で最初に見つかったことからこの名があり、盾形という名称ですが、実際のところ何を表したものかはいまだにはつきりしません。近畿地方を中心に見つかっていて、おそらく権威をあらわす道具だと思われます。古いものは全面を直弧文^{ちよっこもん}という呪術的な文様で飾っていますが、新しくなるにつれて徐々に簡略化され、塚本古墳では中央の横帯^{おうたい}のみを描くものがほとんどです。完全に復元できた埴輪で高さは1.3～1.45mもあり、非常に細長いのが特徴です。

▲ 石見型盾形埴輪

▼ くびれ部付近の埴輪出土状況（南から）



▼ 塚本古墳の復原想像図



もうひとつ珍しい埴輪として大刀形埴輪があります。これは鞘に納めた大刀を立てた状態で表現したもので、柄の部分を中心に見つかっています。柄は先端部の柄頭、手で握る部分の柄間、鞘との境の柄縁からなっていて、柄縁には円筒形の突起物の表現があります。また柄頭と柄縁にかけて手の甲を保護するための帯状の部品が付属しています。柄間には糸か紐を巻き付けた表現があり、帯状の部品の表面には半球形の飾りを貼り付けています。



▲ 大刀形埴輪



▲ 蓋形埴輪

蓋形埴輪は高貴な人に差しかけた笠を表現したもので、多くの古墳で確認される埴輪です。上部にある4枚の羽根飾り部分と笠の部分に分かれていて、これをさらに円筒埴輪の上部に差しこんで古墳の表面を飾っていたとみられます。飾り板の表面には直弧文が描かれていますが、正面に当たるとみられる4面のみに施し、裏側にはまったく描かれていません。おそらく立てる場所が決まっていて、見えない部分は省略したものと考えられます。

円筒埴輪は塚本古墳では最も多く出土しています。この時期の埴輪は須恵器を焼くための窖窯とよばれる施設で焼かれていて、塚本古墳では赤茶色のものから灰色のものまで色にバラエティーがあります。ただ灰色の埴輪の表面にわざわざ赤い顔料を塗ったものがあることから、埴輪は赤茶色が基本色だったと思われます。塚本古墳の円筒埴輪は口縁部から底部まで復元できるものが多く、一つ一つの埴輪の特徴を細部まで観察することができます。それによると埴輪を作る際に使用した道具や技法の違い、細部の造形の差、使われている粘土の違いなどによって、いくつかのグループに分けることが可能です。その中には左利きの人が作ったと見られる埴輪も確認できます。また円筒埴輪の口縁部に様々な線刻を施したものが多くのも特徴です。いずれも「△」や「×」など記号状のもので、絵画のようなものではありません。さらに描く場所も2段目の透かし孔と呼ばれる円形の穴の上という規則性があり、また円筒埴輪と共通する記号が他の朝顔形埴輪や蓋形埴輪にも見られます。これらの記号の違いは、先に述べた個々の埴輪の個性に対応していて、おそらく埴輪を作った工人かそのグループのサインと考えられます。

▼ 朝顔形埴輪（左）と円筒埴輪



▼ 埴輪に刻まれた記号



かい でん 開田古墳群

開田古墳群は、長岡京市役所の北東域を中心に広がって所在する古墳時代中期から飛鳥時代前半にかけて造られた古墳群です。古墳群は、標高 20 ～ 25 m ほどの低位段丘上に立地していて、東羅支群を含めると、25 基前後の古墳と数基の土壙墓がみつっていますが、さらに多くの古墳が埋没している可能性は確実です。墳形は、前方後円墳の可能性のあるものや円墳も確認されていますが、大半は方墳で占められています。その規模は、最も大きいもので一辺が 14 m 前後、最小のものは 5 m ほどしかなく、小規模な古墳で構成された古墳群といえそうです。

埋葬施設は、墳丘が大きく削平を受けているため、確認されていませんが、木棺直葬と考えて間違いないでしょう。また、土壙墓には、須恵器や土師器、それに鉄製の武器と工具を副葬した注目されるものが確認されています。古墳の周溝内からは、土師器や須恵器が出土している事例が多く、埴輪を出土する古墳も少なくありません。ここでは、大量に出土した 13 号墳出土の埴輪を紹介しましょう。

13 号墳からは、円筒埴輪と朝顔形埴輪の他、蓋形、家形、馬形、鶏形、人物形、甲冑形、盾形、靴形など各種の形象埴輪が出土しています。円筒埴輪は、底部径が 16.5cm 前後の小型品が主体で、3 条突帯 4 段構成に復元できそうです。外面の調整は、静止痕のあるヨコハケを施すものやタテハケ、ナデを施すものがあり、黒斑のあるものが多く認められることから、野焼きによるものが主体と考えられます。形象埴輪は、円筒埴輪と同様に、全体に小型品ばかりです。そのうち、家形埴輪には堅魚木を貼り付けたものがあり、馬形埴輪は鞍と鐙、障泥などの馬具を表飾した飾り

馬です。また、鶏形埴輪は、乙訓地域では唯一のもので、鶏冠と肉髯は剥離していますが、目の後方には丸く膨らんだ耳羽を、脚は細い線刻で表現していました。

このように、小規模な古墳とはいえ、首長墓である塚本古墳の埴輪と遜色のない多彩な内容をそなえていることは、注目に値します。

▼ 13 号墳出土の鶏形埴輪



▼ 開田古墳群の復原想像図

